

1. カオハガン島



カオハガン島は、フィリピンのセブ島沖、ラブ＝ラブ市に属する、東京ドーム約1個分の小さな島である。ゆえに、島民は600名ほどで、島1周を歩くのに20分は容易い。

1991年、この島は、日本人である崎山克彦氏によって買収された。以降、崎山氏は島を独自に整備してゆく。おもに力を入れていたのは、「教育」と「医療」である。島には「カオハガン小学

校」という全校生徒数150名ほどの小学校も存在する。

また、島から少し離れたカオハガン沖には、36万平方メートルほどの熱帯珊瑚礁保護区も存在する。「生物の多様化」が、大きな目的の一つであるという。

当然、島に住んでいるのは人間だけではない。日本では見られない植物や昆虫、海洋生物なども多く見られる。その中でも、度々目にする生き物が、犬である。決して野良というわけではなく、島全体で飼っているという印象だ。この犬たちも、3年に2度、名古屋の獣医団体がボランティアでこの島を訪れ、ワクチンや去勢・避妊手術をおこなってくれるそうだ。



2. 衣食住

島民たちが身に付けている衣類は基本、カオハガン島を訪れた人たちが持ち込んだ古着である。年に2度、カオハガン島では、お祭りがあるという。そのお祭りで、集めた古着を島民たちに配るそうだ。その方法は、主に各家庭の女性が代表となって抽選を行い、その抽選結果によって、古着を選ぶ権利を得る、というものである。古着の多くは日本人が持ち込んだものであるため、中にはマラソン大会で使用されたようなものや、学校指定ジャージなども見られ、見ていてなんとも趣深い。

食べ物は日本とそう相違はない。主食は主にフィリピン米で、おかずにはしばしば、魚介類が用いられているようだった。釣った魚を素揚げにして食べていた様子をよく目にした。野菜は、ナス科の野菜が多く食されているようだった。また、主食のおかずにバナナの照り焼きや、炒め物にパイナップルが用いられるのは、フィリピンならではのであろう。現地のバナナは日本とは異なり、生食用ではなく調理用であるため、ほとんど味がなく、比較的小ぶりである。

島民たちが住む家は、もとあった何らかの建物を増築したようなものだった。その多くは木と竹を用いており、通気性に長けた家屋であった。いわゆる常夏であるカオハガン島で、寒さを凌ぐ必要はほとんどない。ちなみに、私たちが使用していたロジはすべて竹でできた高床式の建物である。

3. 言葉

ほとんどの島民たちは、簡単な英語であれば話することができる。さらに、10代から30代の島民たちは、現地の言葉と英語、両方を話することができる、いわゆるバイリンガルである。

現地の言葉は「ビサヤ語」である。ビサヤ語は「セブアノ語」とも呼ばれている。セブ島付近を中心として、約1500万人もの人々に話されている。タガログ語に次いで、フィリピンで2番目に多く話されている言語だ。

私がビサヤ語に抱いた印象はまず、英語より簡単であるということだ。一応、文法はVSO型と決まってはいるが、実際、カオハガン島の人々はほとんど語順を気にせずに話している。英語のように語順によって意味が変わってくることがないため、単語さえ知っていればほとんどの意思疎通が可能であるのだ。発音も、日本語と大きく変わった点はなく、難なく発音することができる。言葉の響きは、韓国語に似ていると感じた。

4. 伝統クラフト作り体験

私が体験したものは、ココナッツ・オイル作り、コースター作り、アクセサリー作りの3つだ。

ココナッツ・オイル作りは、まず、ココナッツを削るところから始めた。あらかじめ半分に割ってあったココナッツの固形胚乳を切り株に留め付けた金具に擦り付けて削る。削ったものを水で濾して一定時間熱すると、それに出来上がる。その工程は私が思っていたよりも手間がかかっていて、その上1つのココナッツからとれるオイルは微量なものであった。カオハガン島では、実用のココナッツ・オイルと、食用のココナッツ・オイルを作

っている。実用のココナッツ・オイルは、おもに人間の体に用いられるもので、食用のココナッツ・オイルは、現地では、生食用のバナナにかけて食されている。

コースター作りでは、ロムロムのコースターを作った。カオハガン島で扱われているコースターはおもに2種類で、布製のキルトでできたものと、ロムロムと呼ばれる樹木でできたものの、この2つだ。ロムロムと竹を細長く裂いたものを、円形に編み込んで行く。最後に、円形の淵に大小さまざまな2色のタカラガイを糸で縫い付けて出来上がりだ。これもまた、単純作業であったが、普段から針仕事をあまりしない私は難渋した。

最終日には、珊瑚のアクセサリも作った。ネックレスとブレスレットの2種類から選ぶことが出来るが、私はブレスレットを選んだ。自分の気に入った形の珊瑚と多種多様なビーズを組み合わせて作る。出来上がったものはほんとうにそれぞれで、性格や価値観を具現化したようにも思えた。

5. カオハガン小学校

崎山氏が島を整備するにあたって、特に力を入れていた事項の1つは、「教育」である。カオハガン島には唯一の教育施設である、「カオハガン小学校」が存在する。私たちは、このカオハガン小学校で小学生たちと交流をしてきた。

まず、上記のように、カオハガン島にある教育施設は、このカオハガン小学校のみである。ゆえに、進学するためには、このカオハガン島から離れなくてはならない。

とはいえ、フィリピンの教育制度は日本とは大きく異なるため、誰もが進学するとは限らない。小学校を卒業してから仕事を始めても、何らおかしいことはない。そもそも、この島の人々は、生きる上で必要なことはすべて、15歳になるまでに身につけてしまうのだという。また、小学校にいわゆる「留年」が存在するため、必ずしも卒業した年齢が幼いとは限らない。その小学校における留年もはや当たり前のもので、たとえば2学年に16歳の生徒がいることなど日常茶飯事だそうだ。もちろん、発達障害などが理由で進級できない生徒も少なくはない。しかし、島の子どもたちは、これもひとつの個性だと受け入れている。偏見という偏見が存在しないため、いじめなど惨たらしいことはまったくない。生徒たちは快く私たちを迎え入れてくれた。今回の研修では、トレイドスコープ作りと外遊びをしたが、生徒たちは何事も楽しげに取り組んでくれた。この性格の豊かさが、日本にも存在すればいいのにと、切に願ってやまない。

6. ホームステイ



カオハガン島に滞在して4日目、私は生まれて初めてのホームステイを経験することになる。もちろん、他の誰かと一緒に、というわけではなく、1つの家庭につき1人が訪問することになっていた。

私は事前の希望調査で、大家族の家庭を希望していた。希望通り、私は11人家族の家庭を訪問することとなった。ホームステイでの目的は、ホストファミリーと一緒に

に半日を過ごし、何もなくて豊かな「持続可能な」生活を体験することであった。目的に従って、私はホストファミリーの家庭で、おもに家事を体験させてもらった。

体験した家事は洗濯、掃除、皿洗い、買い物、料理、子守りと、日本のそれと何ら変わりのない内容であった。しかし、そのどれもが日本とやり方が全く異なっていた。特に印象に残っているものは、洗濯と料理である。洗濯のやり方はひと昔前の日本のやり方と似ていて、全く知らないというわけではなかったが、機械を使わないやり方に何か新鮮なものを感じていた。これは別の人から聞いた話だが、機械で洗うよりも手で洗ったほうが、細かいところまで丁寧に洗えるため、きれいに汚れが落ちるのだそうだ。また、料理では、包丁の使い方に驚愕した。日本のように決まった作法がないため、人によってはとても見てられないほどに危険である。魚を捌く様子も見られたが、捌くというよりかは、食べやすいように切る、という感覚に近いだろう。

昼食は各家庭でとったが、夕食はそれぞれがビーチに集まり、ホストファミリー交流会を行った。メインディッシュは豚の丸焼きで、余談だが、私はこれを屠殺するところから見ていた。

交流会では学生とホストファミリーとで、メッセージ交換を行った。たった半日のホームステイでも愛着は湧いてしまうもので、体験をする傍ら、家族のぬくもりまでも感じてしまい、感極まって思わず泣き出してしまった。彼らが何もなくて豊かに過ごすことが出来るわけを、身を以て学ぶことが出来た。

7. 感想

世界で一番暮らしたい「しあわせの島」として知られているカオハガン島。この島との出会いによって、私の中の幸福論は大きく覆された。

島民たちはしばしば、日本人のことを面白がってこんなことを口遊むという。『問題ない、心配ある』。正に、その通りだと思う。どんなに念入りに物事を進めていたとしても、不安はまるで消えることはなく、それどころかのべつ幕なしに次から次へと湧いて出

てくるのだ。それでいて、そのほとんどが取り越し苦労に終わるものが多い。対して島の人々は、『問題ある、心配ない』。私がカオハガン島で過ごしている間、度々思うことがあった。それは、先のことを考えなくてもいいということだ。また、こんな話も耳にした。『たとえ、選択が間違っていたとしても、神様が道を正してくれる』と。彼らが生きるあのカオハガン島で、間違っただけなどそもそも無いのではないだろうか。後先を案じて、何かに怯えて生きていくより、今この瞬間だけを考えて、楽しみながら生きていくほうが幸せだ。「なんとかなる」という言葉が、とても良く似合う島だった。

「何もなくて豊かな島」、そういった意味では、何かある日本よりも、何もないカオハガン島の方がはるかに豊かで、幸せだ。お金のあることだけが、欲しいものがすぐに手に入ることだけが、いい職に就けることだけが、幸せではない。豊かさとは、なんだろうか。何もなくて豊かな、しあわせの島は、今も幸せそうに呼吸をしている。

